

編集・発行 財団法人国際文化フォーラム（TJF）国際文化交流中心  
二〇〇〇年七月発行 「小溪」Xiaoxi No. 6 忽編 狐晒住送 嶺伉

## 「高校中国語教育」の流れをつくる

### 中国語教育に取り組む教師たち

### 私と中国語

慶應義塾高等学校 人見豊

## 中国語との出会いが学習意欲を喚起

私は現在、慶応義塾高等学校で中国語の教師をしている。

実に中国語との出会いは古く、高校時代に始まる。

当時、学校は好きであったが勉強は好きではなかった。

京都府立山城高校定時制二年生の時、選択科目に中国語の講座ができた。

祖父は日露、父は日中戦争に参戦したこともあり、かねてから中国という国に興味があった私は、早速中国語を履修した。

このことが勉強に対する意欲の始まりであった。

中国語の授業で聞く音、見る漢字、すべてが私にとって新鮮だった。

これまで着実に勉強をしてこなかった私にとって過去の積み重ねを問われない新しい科目で、皆と同時にスタートラインに立てることが何よりも嬉しかった。

そんな理由もあって、中国語との出会いは、遅ればせながら私にやる気を起こさせてくれるきっかけとなった。

しかし、当初中国語は余り進歩しなかった。耳で聞き口で話すことよりも、目で覚え書くことに

重きを置いたものであったためである。

その後、言葉は耳に染み込まず口に慣れず、ただ目から頭の中を通過して、殆ど忘却の彼方へと去ってしまった。

定時制は一般に四年間で終わるところ、私は卒業までわずか数ヶ月という四年生の夏休み明けに、音楽活動を行うため学校を辞めたいと担任に告げた。

担任は私を諭したが、私は学校で過ごした日々を楽しく感じてはいたが、辞めることを少しも惜しいとは思わなかった。

その後プロの音楽グループとして五年足らず活動した後、思うところがあり学校に戻りたいと願った。

学校は除籍を解きやさしく迎え入れてくれた。

こうして私は、ほぼ十年かかって高校を卒業したのである。

## 中国への憧れと幻滅

その後大学に進学し、中国文学を専攻した私は中国語を履修したが、その授業は原典購読を念頭に置いたもので初級の学習法は高校と余り変わらず、別に語学学校（日中学院・中国語研究所）に

通って発音からやり直すことにした。

学部卒業後、修士課程、博士課程へと進み、中国文学の研究を続けた。

修士終了後一九七八年に、現在勤める高等学校に就職した。

高校教師と博士課程の学生を続けていた三十四歳の時、文部省の中国への留学制度が正式に始まった。制限年令は三十五歳までという。

かねてより留学したいと思っていた私にとっては、まさに最後のチャンスであった。

勤務校の留学許可を得て、その夢は翌年実現した。

日々の単調な高等学校の教師生活からひたすら逃れたいという甘えた気持ちもあつたためか、夢にまで見た留学であつたのにもかかわらず、比較的自由気俣に暮らしてきた私にとって、当時は拘束の多い社会主義国であつた中国における一般市民と隔離された留学生活は、思った程楽しくはなかつた。

次第に中国に対して批判的になり、二年の留学期間を充分に実りのあるものに出来たとは言えない。

## 高校の中国語師として

帰国後、勤務校に戻り第二外国語として始まった中国語を担当することになった。

一時期担当を外れたこともあるが、通算すれば九年間中国語を教えたことになる。

一九九三年には、北京第四中学校から我校に交換留学制度を設けないかという申し入れがあり、私は校長からその交渉役を依頼された。今は故人となってしまった当時の校長は、留学前に初めて友好訪中団として中国へ旅行した際に同行した大学の教授であり、折に触れて私の意見を取り上げてくれる人だった。

その任務を果たす為にも、その校長の為にも、そして自分の為にも初心に戻り中国語に専心しようという思いが今までになく募っていった。

一九九五年、第四中学校との交換留学と姉妹校の提携関係を何とか結べないものかと、留学以来十数年ぶりに北京に行った。

その間に天安門事件もあったが、北京の街は以前と比べ物にならないほど自由な空気に満ち溢れていた。

更にそれから五年後の今春、修学旅行の下見を兼ねて四中を再訪し、今後は地道な交流を礎にし

てより一層交流を深めようと話し合った。

交流の話は、著しい進展が見られないまま現在に至っているが、ゆくゆくは両校間での本格的な交流を是非、実現させたいと思っている。

中国語教學歴を積み重ねていく中で、私は依然として中国語の教員免許を持たずに授業を続けていた。

県教委から指導を受けた学校側の要請もあり、私は意を決して中国語の免許を取ることにした。

博士課程まで行っていたおかげで、免許を取るために新たに取得する単位数は多くはなかったが、中国語の教職課程のある学校自体がわずかしかない上に、そのわずかな学校すら事実上一般の「科目等履修」では受け入れないという状況であった。

そんな中、麗澤大学で受け入れてもらえることとなり、学部生に混じって2年間通学し、やっとの思いで勤務を続けながら単位を取得した。

晴れて今年から無免許授業は避けられることになった。

随分と時間がかかり紆余曲折はあったものの、かつて中国に憧れ、中国に幻滅し、今は良い面と悪い面の両方を少しは冷静に受け止められるようになった。

より実像に近い中国を見られるようになってきたかなあと思いつつ、今後とも中国との交流に少しでも役に立ちたいと念願している昨今である。